

## 「あなたの気持ちを受けとるとき」

～ 9月29日 前期終業式 副校長講話 ～

### 前期を振り返って(1, 3, 5年生の発表)

9月29日、4月5日から始まった105日間の前期の終業式が行われました。終業式で行われた各学年の発表では、1年2組は自然体験園になっていた実が、アンズなのかウメなのかを知りたくて、理科専科の伊藤先生に聞いたり、果樹試験場の笹脇さんに聞いたり、アンズの里スケッチパークに行っておアンズの人々に聞いたりして、アンズだということを突き止めていった様子を発表してくれました。3年1組は全校を囲むように体育館の壁に広がって、「わたし・ぼくがハッピーになるとき」を一人ひとり発表しました。「おにごっこをしているとき」「3年1組村をするとき」「みんなと遊んで笑顔になれたとき」「みんなと今しかできないことをするとき」などを、マイクを使わず元気な声で発表できました。5年2組は初めての「美と力」を振り返り、自分たちが考えた「美」と



は、「単純だけど難しい『立ち姿』」「指先まで伸ばすこと」「最後までやり遂げること」など、「力」とは「みんなで協力し合う中で生まれてくるもの」「砂だらけになりながら立ち続ける心の強さ」などと、心と体を通して友と感じた美と力に込められた意味を語ってくれました。



### 副校長先生のお話

#### 1. 高木先生とのやりとり「焼き肉行かない？」

皆さんが反応したあの「シーン」を今一度。

〔高木先生と副校長先生が「焼き肉行かない？」(平成29年5月16日の副校長講話)を再演〕

…あの時のやりとりを聴いていた皆さんが、「田中先生は高木先生のことをちゃんと聴いているのか」と考えた人と、「高木先生はどうあったらよかったか」と考えた人がいたことを聴きました。

## 2. 前期始業式 「聴き合おう」

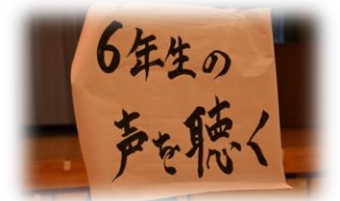
前期始業式でお話させていただいたことがあります。

児童会テーマ「聴き合おう」。この「聴く」ということ「聴き合う」ということが、運動会が終わった今、どう皆さんの中に息づいているのか。それとも遠い昔の過去になってしまっているのか。

運動会の一週間前、6年生は「みんなが頑張った。やりきったと思える運動会にするにはどうしたらいいか」語り合い、それぞれの教室を訪問しました。

そして、「号砲のない運動会」を創り上げました。

6年生だけでは成し遂げられない、1年生から5年生までが6年生の声を聴くことから生まれた歴史に残る出来事なんです。



## 3. 14年前の附属長野小での出来事 「ヒツジはセーターのため」

実は、運動会で皆さんが考え合い、動き出すところまではいかなかったけれど、14年前に、こんなことがありました。

今で言えば、通学を考える会のような児童集会の場で、1年生が全校のみんなに呼びかけていくんです。先生が1年生の役になって先生たちは他の学年の人たちになってやってみます。

田中「あのう、全校の皆さん、きいてください。僕たちの学級では、ヒツジを飼っています。でも、広いところで自由に遊ばせたいので、自然体験園に首輪とかつけないで遊ばせてもいいですか」

こんな感じで全校に呼びかけたんです。すると、聴いていたそれぞれの学年の人たちが手を挙げて発言するわけです。こんな感じです。

「5年1組の市川です。あのう、他の人も遊ぶ場所なので、それはいけないと思います」

「それにあちこちにうんちしちゃったらどうするんですか」(市川先生)

「うんちはぼくたちでかたづけます」(田中副校長先生)

「どうして、自然体験園に放したいんですか」(清水先生)

「自由にさせたいからです」(田中副校長先生)

「それは、本当にヒツジのためになるんですか」(大畑先生)



「自然体験園は、1年生のためだけのものではないと思います」(手塚先生)

そして、ここでこんな意見が6年生から出たんです

「そもそも、どうして一年一組では、ヒツジを飼っているんですか」(吉澤先生)

「えっとお、ヒツジの毛からセーターを創りたいからです」(田中副校長先生)

この子はきっと、ヒツジの毛からセーターが創れるって思っていたんでしょうね。でも、このあと大変でした。

「それって、ヒツジのためではなくて、自分たちのためにヒツジ

をかっているということにならないですか」(白井先生)

「ひつじがかわいそう」(北原先生)

こうして、児童集会が終わっていきました。1年生は何も言えなくなってしまい、ちんやりして教室に戻りました。

すると、さっき「そもそもどうしてヒツジを飼っているんですか」といった当時6年1組だった子どもたちが、全員で1年生の教室に来てくれました。そして、こう尋ねてくれました。

「あの時、セーターを創りたいって言っていたけど、本当にそうなの」(吉澤先生)

「本当は違うんじゃないの」(山極先生)

ここです。

ここで、初めて「ヒツジの毛を使ってセーターを創りたいからです」といった男の子は、わーって泣き出しました。あんなに全校に言い寄られたときでなく、ここで泣き出しました。ずっとがまんしていたんでしょうね。

この子は6年生に救われました。

そうなんです。ヒツジの毛を使ってセーターを創りたいといったのは、こんなこともできるかもという思いであって、ヒツジを飼いたい理由ではなかったのです。

#### 4. 聴くということ

聴き入れるということ 人の話を受け入れるということは、  
一体どういうことなのかなあということをやっと考えてみました。

気持ちを「箱」に例えて、  
ここに自分の気持ちというのがあったとします。



そこに、もうひとつの箱の他の人の気持ちが自分に届いたとします。(自分の箱を持っている田中副校長先生に、中澤先生が箱を渡そうとする) 例えば、こちらの箱(中澤先生)は「ヒツジの毛をセーターにするために育てている」みたいな気持ちだったとします。しかし、自分の気持ちは、「ヒツジの毛をセーターにするなんて、とんでもないという気持ち」です。このままでは、この箱と箱はぶつかり合うだけです。

上に重ねるとか、積み上げるということもできますが、人間はそんなに器用ではありません。

一端自分の気持ちを横において、相手の気持ちを受け取ったら、どうでしょうか。



「聴き合おう」というテーマで過ごした前期が、ここで終わります。

ここまで、みなさん一人ひとりにもやりきったといえることがあるでしょう。前期、やりきったことがある皆さんだからこそ、新たな挑戦がうまれるはずです。

## 5. あらたな一步を踏み出すということ

実は、私もずっと前からみなさんとやってみたいことがあるんです。

それは、何かというと、紙ひこうきをとばしてみたいんです。

紙ひこうきといっても普通の紙ひこうきじゃありません。これです。(紙ひこうきを出し、やってみせる)

これをどうしても、みんなとやってみたいんです。

これから配るね… 配られたら、やってみて。



聴き合うということ、聴くこと、そして、聴くことによって、新たに挑戦すること。そんな話を先生自身の挑戦に合わせてやってみました。

終わります。